地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

「地方出版社二代目として思うこと」

埼玉県の著述文化を担っていく若手著者の支援、文化圏の壁を超えた出版活動などが、今後の抱負と展開

文・まつやま書房編集主幹　山本智紀

幼少時の記憶

1980年、埼玉県の地方出版社の一つとしてまつやま書房は父・山本正史によって創業されました。「地元をネタにした本が本屋や図書館にあまり見当たらない。なら自分が…」という至極シンプルな理由で、同世代と比較して水準以上の給料を貰えた業界新聞の記者だった父が突発的に出版会社を立ち上げたことは母にとって寝耳に水のことでした（今でもよく冗談半分に愚痴ります）。そのとき自分こと次男坊の山本智紀はまだ生まれたばかりの一歳児でした。

それから幼稚園に入る前後までですが、睡眠前に父から民話をよく聞かせられました。その民話の内容は「地元の本」として刊行したまつやま書房の記念すべき第一冊目『埼玉夜話』からです。女影の小袖／河童の妙薬／夜泣き松／狐の嫁入り…などなど、他県にもあるどこか似たような話や身近な地名が入った話、それら様々な要素が詰まった読み聞かせのおかげで、幼少ながら埼玉県というものを憧れと畏敬を交えつつ漠然と捉えることができていたような気がします。

さて時は少し経過し小学生になった自分は、休みの日（夏季休暇など）などには父に連れられ、県内の書店営業のお供として三歳上の兄と一緒にあちらこちら車で巡りました。このときの経験もあって兄も自分も埼玉県内の道ならカーナビ不要、県内の市町村の街並みの様子や主要地名もだいたい諳んじられます。

こういった記憶を振り返ってみると、郷土の出版社の仕事に携わるのもなるべくしてなった事、と言っても良いかもしれません。

編集見習いとして始める

話を一度折りますが、創業は1980年、自分が大学中退して出版活動を手伝い始めたのが2003年、と小社ではおおよそ20年の周期がなんらかの節目となってます。日頃お世話になってる地方・小流通センター様から20年の周期に近い今年2022年に本稿執筆を依頼されたのも良い折かと思えます。

出版活動を手伝い始め、周囲の方から多くの苦言をいただきました。「他の会社に修行したのちに継いだ方がいいのでは？」など。しかし差し迫った事情もありました。明け透けに書きますが、創業20年が経過した当時の財政状況はかなり逼迫していました。プチヒットな書籍は出していましたが、けっして裕福な生活を送った覚えはありません。借金支払い催促の電話が頻繁に鳴り、諸方面の支払いも滞っていた状況でした。そんな感じで、20世紀末の熱狂的なバブル絶頂・バブル崩壊の乱気流な世間とも我関せずにひたすらひたすら低空を単独飛行状態で続けておりました。

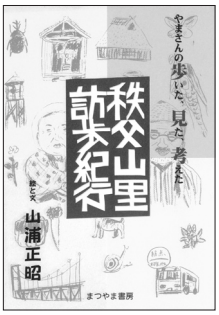
しかしいくら低空飛行でも燃料がなくなれば軟着陸（この場合は墜落か）せざるを得ません。一度でも地に着けば小社の20年の軌跡はどうなるか…名は残るが業績は霧散してしまうのでは？…そんな危機感がありました。

とにかく父の編集を手伝うことからはじめて、あとは追々考えよう…。結局は創業した父とほとんど同じな無鉄砲さでこの仕事に携わることに。いただいた苦言どおりに修行に出てから戻ってれば業務捌きの質が違っていたのでは…と今でも思いふける時があります。しかし運の良さもあって、なんとか父と共に出版を続けることができております。

時節もちょうど良くありました。折しもパソコン普及によるDTP一般化の波がきており、DTPアプリの教本や雑誌も書店に溢れ、まずは組み版やデザイン関連を中心とした業務手伝いから始めようとした自分には大変良い環境でした。とにかくたくさんの本を読みあさり見よう見まねで実践をしました。おかげでいまでも我流ながらなんとかDTPの各アプリを使えております。

携わった書籍たち

一番はじめに手がけた仕事は『秩父山里訪歩紀行―やまさんの歩いた、見た、考えた』（山浦正昭氏）でした。この本で、埼玉秩父地方の山村風景の奥深さや他県との密接なつながりをもっていた秩父古道を中心とした生活を垣間見ることができ、学ぶことも多々あった仕事です。



『秩父山里訪歩紀行―やまさんの歩いた、見た、考えた』978-4-89623-025-3

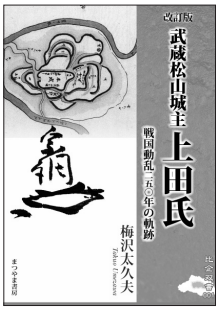
山浦氏は野外旅行の研究・指導や欧州縦断などのウォーカーとして著名な方で、地元東松山のウォーキングイベントに参加されていた時に偶然小社看板を見かけ、この都心から離れた地域

に出版社があるのかと声掛けいただいたのがこの企画のきっかけでした。秩父地方は埼玉のなかでも唯一観光地としても他県の方に紹介できる地域です。そのように埼玉県において特殊な位置づけの秩父地方はできるだけコンスタントに関連書籍を刊行していきたい地域であり、その地域の楽しさと魅力に触れられる著作に真っ先に出会えたのは幸運だったと思えます。

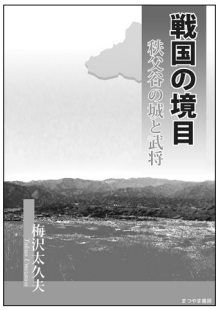
また、昨今は郷土史書籍が小社の売り上げを伸ばしてますが、郷土史研究の方達と出会えたことも幸運でありました。なかでも県内各地の県立博物館の館長を歴任され、今でも秩父・児玉地方の戦国期研究で活動されている梅沢太久夫氏の『武蔵松山城主－上田氏』『戦国の境目－秩父谷の城と武将－』『北条氏邦と鉢形領支配』などを続けて刊行できたのは小社の一つの転換点だったと感じます。「埼玉県の歴史」的な全県を紹介する書籍は他社からも出てますが、ごく一部の狭い地域にスポットライトを充てたマニアックな歴史書籍が果たして売れるのか、一つの賭けでありました。

しかし結果的には数度重版のかかる書籍もあり、また県内から梅沢氏の本を購読したという郷土史家からの声がけも多くなり、郷土史を刊行する出版社としての信頼性があがる嚆矢となったのです。梅沢氏は戦国期を中心とした歴史講演を各所から依頼される方なので、梅沢ファンなる人が最低でも県内400人は見込めます。購読数に確実性のある著者と巡りあえたのも編集者冥利につきます。

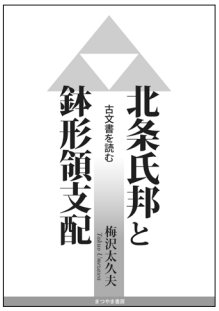
最近では自分と同世代の著者も増えてきました。なかでも県北の史跡や民俗をわかりやすく紹介した『羽生行田加須・歴史周訪ヒストリア』『古利根川奇譚－埼玉ヒストリア探訪－』を書いた髙鳥邦仁氏の二冊は、県北を重点的に紹介した書籍が今まであまり無かったため、各書店に大変喜ばれました。羽生城研究で著名な冨田勝治先生の晩年に師事した髙鳥氏は、現在も県北を中心に積極的に郷土史研究活動され、講演や史跡案内も実施しています。梅沢氏と比較するとまだ髙鳥ファンは少ないのですが、地道な活動成果として徐々に増えていき、著作物もブースターになってくれればと願っております。



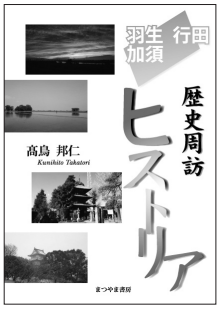
『武蔵松山城主－上田氏』978-4-89623-072-7



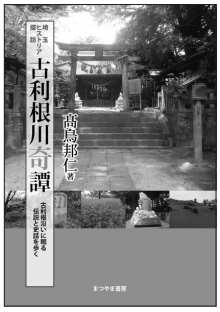
『戦国の境目－秩父谷の城と武将－』978-4-89623-083-3



『北条氏邦と鉢形領支配』978-4-89623-092-5



『羽生行田加須・歴史周訪ヒストリア』978-4-89623-096-3



『古利根川奇譚－埼玉ヒストリア探訪－』978-4-89623-115-1

す。

こんな感じで編集手伝いをはじめて20年が経過し、おおよそ150冊の書籍に携わりました。父の代からの書籍と併せると約300冊近くとなりますが、200冊を超えたあたりでやっと地方出版社として世間から認められたのか、多少は経営が安定しか感があります。

二代目として今後の展開

さてここまで連々と自分語りとなってしまい恐縮ですが、一応「地方出版社の二代目」というテーマなので、その辺のことも絡め今後の小社の展開願望みたいなのを書きます。

まず第一点。前述したとおり、自分と同世代の若い（とはいえ30代後半から）著者が増えています。しかしながらまだ発表する場を得られない著者予備軍も多くいる現状です。今後の埼玉県の著述文化を担っていく大事な才能ですので、できるかぎりの支援と発表の場を設けられればと考えています。

第二点としては、埼玉県内の地方出版社を名乗ってはいますが、あまり埼玉県自体にこだわらない書籍刊行も模索できればと。これは決して他県の書籍を、というわけではありません。例えばですが、埼玉県と栃木群馬両県の間を縫う河川「利根川」。現在では行政境界によって県境の向こう側は異なる文化圏の壁を多くの方が意識しています。しかしちょっと前までは、右岸左岸の両岸は河川を中心と捉えた同じ文化圏であったわけです。これは秩父の山々も同様です。県境による区別も大事ではありますが、この意識の復活を促す書籍を刊行し続けられたらと思います。

三点目としては、これは小社の将来的な展開とは異なりますが、埼玉県内にもっと地方出版社が増えてくれればと願ってやみません。ライバル社が増えればネタかぶりでシェアを食い合うのではと疑問に思われますが、かぶる程度のネタを出版物にしてもたかがしれてますし、類書のない書籍、または類書からひときわ着眼点が異なる書籍を企画するのも編集者としての醍醐味かと僭越ながら感じております。多種多様な着眼点をもった出版社によって多くの出版物が刊行され、その書籍を購読した若い世代の著者の卵たちが育ってくれれば、巡り巡って小社としても利点となります。

埼玉県の人口は約730万人。欧州の小国なみの巨大な人口を抱えた県です。東部・南部・北部・西部・秩父地方でだいぶ異なる文化圏があり、それぞれの地方都市に出版社があっても良いぐらいです。

ただ出版点数をある程度出すまで

は、爪に火を灯す貧乏生活を強いられることはひたすら低空飛行を続けた実体験からして確実です。ただそこまでして出版をしたいバカが730万人のうち数人はいてもいいと思います。

思えば父はバカでありました。そして自分も運が良いだけのバカです。ここに新しいバカ同士で埼玉出版文化が一段と向上すればありがたいものだと、とりとめのない拙文の締めとさせていただきます。

（やまもと　とものり・まつやま書房編集主幹）

＊

新刊ダイジェスト

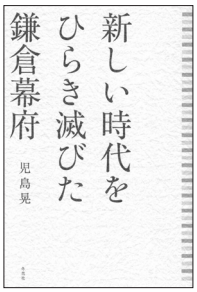
表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

弊社のホームページでは半年前までの本誌バックナンバーをアップしております。また「新刊ダイジェスト」のバックナンバーもたくさん掲載してます。

アドレスは下記の通りです。右記のＱＲコードもご利用ください。

URL：http://neil.chips.jp/chihosho/

『新しい時代をひらき滅びた鎌倉幕府』●児島晃著

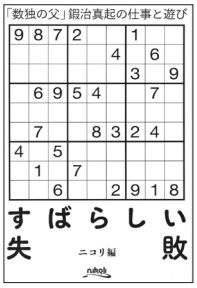


著者は日本近世の幕藩体制がヨーロッパ中世においても成し得なかった最も理想的な封建制度を完成させた社会だと評価する。そしてその基礎を作ったのが鎌倉幕府であり、最大の功労者が源頼朝と東国武士、著者の言葉を借りるなら「東夷（あずまえびす）」だというわけである。かつてのように「封建制」について論じることが複雑多様化した現代においてどれほど有意義なことなのか一先ず保留しておこう。昨今では江戸時代を封建社会と捉えず、「初期近代」であるとの説が主流となりつつあることも念頭に置かなければなるまい。著者の鎌倉幕府観は、「荒れ果てた東国を蘇らせた武士でもある開発領主たちが、頼朝を中心に結束してうち建てた『東国の王権』」である。幕府成立を1180年（治承4）12月12日に新造の鎌倉御所に移り住む儀式「移徙の儀」に求めるのも、頼朝を頂点とする軍事政権が南関東を制圧した時期に重きを置いたからであろう。1185年（文治元）説や1192年（建久3）説などがあるが、今は段階的に成立していったとみるのが無難であろう。

頼朝による「御恩と奉公の関係によって結ばれる封建的主従関係に基づく強力な軍事集団」と、徳川幕藩体制の「独立性の強く持った地方国である藩を、将軍が強力に統率する統一国家体制」を理想とする著者は「自家の権益の保全と発展」に邁進する為政者の存在が障害物となったと指摘。鎌倉北条氏の得宗専制や戦国大名の群雄割拠などが該当するという。（Ｉ）

◆1800円・四六判・311頁・**冬花社**・神奈川・202209刊・ISBN9784908004476

『すばらしい失敗 ー「数独の父」鍛冶真起の仕事と遊び』●ニコリ編著

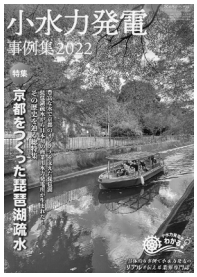


タテ９列、ヨコ９列のそれぞれのマスの中に１から９までの数字をひとつづつ入れていくシンプルなペンシルパズル「数独」。１ケタの数字のみを使うため「一人者→独身」という発想から命名され、世界的なブームを巻き起こした。この名付け親が2021年８月に69歳で亡くなった鍛治真起さん。日本初となるパズル雑誌『パズル通信ニコリ』の創刊者の一人でもあり、雑誌のタイトルも競馬をこよなく愛する鍛治さんが喫茶店で目にしたスポーツ新聞の三行記事「イギリスのダービーの一番人気馬はニコリ」に由来している。のちに競走馬を引退し、種牡馬となったニコリに会いにウルグアイまで行くというフットワークの軽さも持ち合わせていた。

ときにユニークな発想家、ときに世界を股にかけるビジネスマン、さらに「俺の生涯納税額は国内屈指」と言うほど酒、タバコ、ギャンブルなどにハマり“遊び人”と呼ばれた鍛治さんの人生と仕事について周囲の人の話をまとめ、「数独の父」の素顔に迫る。会社経営に苦悩した時もあったが、抜群の把握力、記憶力、表現力を備え、誰からも好かれる天性の魅力があった。本書のタイトルの由来は冒頭に出てくるが、ここにも人柄が表れている。評判だったコピーやイラストも一部掲載。「パズルを解いている時は日常のあれこれの悩みを忘れられる。誰かの毎日をちょっとだけ楽しくしたい」何かと窮屈な世の中だが、鍛治さんの言葉には強張っていた気持ちをほぐす力が確かにある。（Ｙ）

◆1800円・四六判・319頁・**ニコリ**・東京・202210刊・ISBN9784890723799

『小水力発電事例集　２０２２』●全国小水力利用推進協議会編著



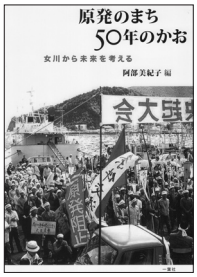
日本三大疏水は福島県の安積疏水、栃木県の那須疏水、そして琵琶湖疏水である。本年号は琵琶湖疏水の特集である。琵琶湖疏水は明治23年に完成した第１疏水と疏水分線、同45年に完成した第２疏水で構成される。第１疏水は大津市観音寺の取水口長等山を貫く第トンネルを通って、京都市内に入り、山裾を縫うように西へ流れ諸羽トンネル・第２トンネル・第３トンネルを通って蹴上に至る。ここで疏水の水はトンネルを通って分岐する。

一方暗渠水路を通って麓の南禅寺船溜へ、もう一方は蹴上発電所の取水池および支線水路へ流れる。平安神宮、美術館等を流れ、鴨川と合流する。幕末、禁門の変等で洛中に大きな被害を及ぼし、東本願寺等の被害を受け、さらに東京遷都で天皇、公家、商人らが移り、京都に活気がなくなった。京都の復興と近代化を図るため、京都府知事・北垣国道は琵琶湖疏水を計画し、その工事を実地したのは若き土木技師田邊朔郎である。日本初の商業水力発電所も生まれ、京都は甦った。

さて以上特集記事以外に今年号に掲載されている小水力発電所を掲げてみる。小野草（秋田県）、鶴の湯（秋田県）、宝沢ほたる（山形県）、米沢大平（山形県）、三郷黒沢川（長野県）、くだものの里まつかわ（長野県）、小渋えんまん（長野県）、細ノ洞（長野県）、関の沢（静岡県）、安房谷（岐阜県）、金沢ゆわく（石川県）、坂井市川上（福井県）、笹倉ダム（島根県）、泊野川（鹿児島県）。　（古賀邦雄　古賀河川図書館）

◆800円・Ａ４判・63頁・**水のちから出版**・東京・202211刊・ISBN9784991107931

『原発のまち　５０年のかお　女川から未来を考える』●阿部美紀子編



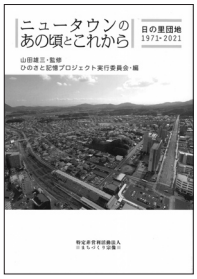
東日本大震災の翌年、女川原発反対運動の地元リーダー（この写真集の編者の父親）に、闘争最盛期の一連の写真の存在を聞いてから、ちょうど10年。文字どおり奇跡的で、かつ貴重な記録であるその「女川原発反対の写真集」が、やっと日の目を見ることに。いみじくも、現政権がこりもせずに原発の大幅な再稼働の推進や新増設の方針を発表したこの今。写真のほとんどは約50年前に、闘争の参加者自身（編者）が普通のカメラで撮ったものだが、そもそも行政と電力会社の用心棒と化した機動隊の暴力から漁民や町民を守るためにカメラを向けたものである。それゆえか、写真１点１点のどれにも、なんとも言えない迫力と熱量、怒りと痛みと慈しみが溢れている。

あの東日本大震災で壊滅的な被害を被った女川町。町在住の編者が所持していたこれら一連の写真も、大津波ですべて流され消失したと思われていたのだが、なんとその写真データをパソコンに保存している方が仙台に。こうして紆余曲折の末に生まれたのが、この写真集である。

これらの写真を見ると、もともとは原発なんて誰も望んではいなかった――海で生きる人びとにとって海はいのちそのものであり、「原発阻止」はいのちを守るやむなきたたかいであったことが心底実感できる。　今の若い人たちに、原発の町で生きた、そして生き続けている、たたかう人びとの顔や姿に彫り込まれた不屈の刻印をぜひ凝視していただきたい。（和）

◆2000円・Ａ４判・135頁・**一葉社**・東京・202211刊・ISBN9784871960878

『ニュータウンのあの頃とこれから　日の里団地１９７１－２０２１』●山田雄三著



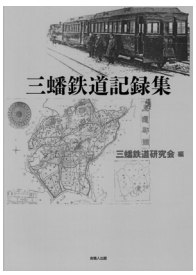
高度経済成長真っただ中の1971年、福岡市と北九州市の中間にある宗像市郊外に、５千戸、１万４千人という九州最大のニュータウン「日の里団地」が開発された。募集パンフレットに、「緑と太陽につつまれた街にあなたのスイートホームを」の文字が躍っている。

それから半世紀を経て、同時期の全国のニュータウンと同様に、高齢化による人口減少が進み、空き家の増加、建物の老朽化、商店の撤退といった課題に直面している。日の里団地を何とか再生させたい。５年前、この街に暮らす団地再生拠点「ＣｏＣｏｋａｒａひのさと」の女性館長と、旧三井三池炭鉱労働者家族のライフヒストリーに取り組む本書監修者との出会いをきっかけに、住民、研究者、学生、新聞記者、福祉や建築関係者ら多様な人々によって「ひのさと記憶プロジェクト実行委員会」が結成された。大切なことは、この街で生きてきた経験や思いを記録するであるとの考えから、約120名からの聞き取りと、700点の写真のデジタル化が行われた。

本書の核心はその聞き取りにある。新しい祭りを始めようと奔走する姿、子どもたちの心身を育てたビニールハウスのプール、立ち読み大歓迎で住民の居場所となった書店、どれも重要な証言だが、昨年亡くなった老婦人が、この街を故郷として伝えていきたいと語るのには胸を打たれる。再開発ではなく、記憶を継承し、人の絆から街を再生していこうという発想は大きな示唆に富むものである。（飯澤文夫）

◆1800円・Ａ５判・243頁・**弦書房**・福岡・202208刊・ISBN9784863292550

『三蟠鉄道記録集』●三蟠鉄道研究会編著



三蟠鉄道はかつて岡山市の旭川左岸、三蟠駅と桜橋(のちに国清寺)駅の間を結んでいた鉄道です。その距離は10キロにも満たず、またレールの幅も国鉄などよりも狭い762ミリの軽便鉄道でした。開通は1915年。その当時旭川は川床が浅く船が遡上できず、そのため児島湾に近い三蟠港から市内方面へ連絡船利用者や物資を運ぶことを目的に敷設されました。しかし旭川の改修が進んだことやバスとの競合のために、早くも1931年には廃止に追い込まれています。それはわずか16年の営業でしたが、その雄姿は70万岡山市民に今なお強く記憶されている…わけではなく、かなり忘れ去られていました。

本書はそんな埋もれつつあった鉄道の歴史を語り継ぐべく活動してきた三蟠鉄道研究会による、三蟠鉄道の解説と活動の記録をまとめたものです。様々な資料を用いて三蟠鉄道の背景に迫る研究もさることながら、本書で特筆されるのは開通100周年事業における研究会の活躍ぶりです。かつての利用者の証言収集はこの機が最後のチャンスともいえる非常に貴重なものですし、駅跡地に駅名板を建てたり、ゆかりの地でのスタンプラリー、かつて走っていた蒸気機関車を模した神輿の作成などは、三蟠鉄道の記憶を甦らせるとともに人々の心にその存在を深く刻みつけたでしょう。地域コミュニティや行政をも巻き込んで、様々な顕彰事業に取り組んだ研究会の活動は地域おこしの一例として読んでもとても興味深いものです。（副隊長）

◆3000円・B5判・361頁・**吉備人出版**・岡山・202209刊・ISBN9784860696856

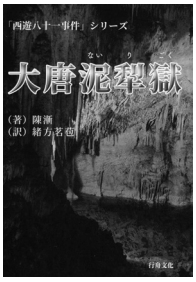
『十三湊　幻影 －安藤氏と中世北方世界　津軽・十三湖』●工藤弘之著

十三湊といえば、新刊書が軒並みに出版されるなど2000年代まで活発だった日本列島の歴史や社会史に関する研究の中において、中世の港湾都市の代表的存在だったことを思い出す。中世都市の痕跡がタイムカプセルのごとく現代に甦ったのは、その遺跡の規模からいってもかつての備後国草戸千軒町と並ぶ衝撃だった。しかし、著者も指摘しているように2005年の市町村の大合併により世間から忘れ去られた存在となってしまったのは残念である。かつて学際的研究をリードしてきた中世史の研究も昨今は狭小化している感があり危機感を抱かせる。世の中の閉塞感と軌を一にしているようで気になる。

中世の十三湊の存在が注目される画期となったのは1991年から始まった国立歴史民俗博物館による発掘調査である。十三湊は前潟（まえがた）と十三湖である後潟（うしろがた）とに挟まれた南北に細長い砂州。中央の大土塁を境に北は領主館・武家屋敷、南は町屋・寺院と考えられたが、遺跡から出土する陶磁器を分析した五所川原教育委員会の榊原滋高氏によれば、北側は港の最盛期だった14世紀後半から15世紀前半、南側は衰退期の15世紀半ばであり、両者は時期が異なることが判明。都市が北から南に移動したきっかけは南部氏がこの地を治める安藤氏に攻撃を仕掛けたことによる。本書は東奥日報で連載したものを加筆再編集、考古学と文献史学の成果を踏まえイメージ写真とのコラボで綴る異色の歴史紀行書である。（Ｉ）

◆1800円・B5判・103頁・**東奥日報社**・青森・202208刊・ISBN9784885612671

『大唐泥犁獄』●緒方茗苞 訳 / 陳漸 著



仏教における六道のうち、上三道は天道、阿修羅道、人道を、下三道は畜生道、餓鬼道、地獄道をそれぞれ指し、地獄は「泥犁」と訳される。俗世で大罪を犯した者が落ちるとされる、畜生道と餓鬼道よりも苛酷で、終わりなき苦しみを受け続ける地獄世界がタイトルにある「泥犁獄」である。

時は大唐帝国、二代李世民の世であるが、物語は長捷という僧侶が師である老僧を斬首、さらにある僧の訪問を受けた霍邑県令・崔珏が僧と泥犁獄についての問答後、首吊り自殺を図るという二つの謎の死がプロローグ。そして霍邑県に天竺人の従者、波羅葉を連れた主人公、玄奘法師が現れ、第一章が始まる。興唐寺という名刹を目指していた玄奘だが、現県令の郭宰の屋敷に案内され、彼の妻李優娘とその娘崔緑羅の存在を知るが、次第に興唐寺及び泥犁獄を舞台とする陰謀に巻き込まれていく。実は玄奘は長捷の弟であり、兄の行方を捜す旅をしていたのである。玄奘は『西遊記』の三蔵法師として有名だが、孫悟空や妖怪変化が目立つ中で、お人好しでなんとも頼りない人物として描かれているが、本書では「探偵」として頭脳明晰で身体的にも逞しい僧となっている。

作者の陳漸が「『西遊記』の革新者」として高く評価されている所以である。実在した歴史上の人物も登場、それぞれのキャラクターも魅力的。壮大なスケールを背景に、どんでん返しもロマンスも兼ね備えた中国歴史長編ミステリー。（Y）

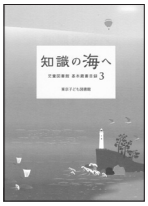
◆2000円・B6判・496頁・**行舟文化**・福岡・202208刊・ISBN9784909735119

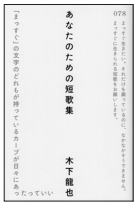
売行良好書

期間：2022年10月15日～11月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

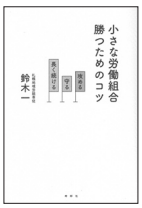
(1)『特別報道写真集　大谷翔平２０２２　伝説を超えた二刀流』1300円・岩手日報社　(2)『オールアラウンドユー』1800円・ナナロク社　(3)『小さきものの近代１』3000円・弦書房　(4)『知識の海へ』3600円・東京子ども図書館　(5)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(6)『となりの谷川俊太郎』1454円・ポエムピース　(7)『九州・沖縄の日刊地域紙』2800円・南方新社　(8)『福岡・九州の災害地名』2000円・忘羊社　(9)『情報の歴史２１』6800円・編集工学研究所　(10)『天才による凡人のための短歌教室』1200円・ナナロク社　(11)『出雲と蘇我王国』2200円・大元出版　(12)『極度の心配性で苦しむ私は、強迫性障害でした！！』1300円・燦燦舎

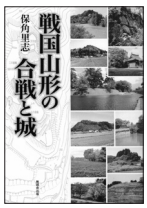




［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『小さきものの近代１』3000円・弦書房　(2)『小さな労働組合　勝つためのコツ　攻める 守る 長く続ける』1800円・寿郎社　(3)『戦国山形の合戦と城』1900円・無明舎出版　(4)『刀剣』1800円・ハーベスト出版　(5)『千夜曳獏』1800円・青磁社　(6)『中国中世の服飾』3800円・中国書店　(7)『なごや街と交通の一世紀』8000円・樹林舎　(8)『毛鉤釣手帖　第１号』2273円・黒石商店　(9)『ペストの古今東西』1500円・秋田文化出版　(10)『自治体庁舎の行政学』3500円・溪水社　(11)『信州発掘奮戦録』2000円・ボロンテ　(12)『ジオパーク秩父　公式ガイドブック　秩父に息づく大地の記憶』1500円・さきたま出版会　(13)『よくわかる琉球 沖縄史』1200円・琉球新報社　(14)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版　(15)『茨城県北ジオブック』1000円・茨城新聞社　(16)『連赤に問う』1500円・上毛新聞社

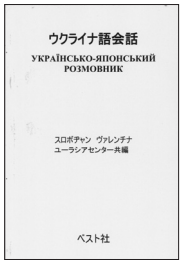




以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼スロボヂヤン・ヴァレンチナ／ユーラシアセンター共著**【ウクライナ語会話】**（本体価格3,500円　ベスト社刊）は、日本人読者ばかりではなく、戦禍を逃れて母国から日本に避難されているウクライナの方々も想定されています。2019年に発行した【ウクライナ語会話・文法】から文法編を取り除き、会話編と付録の日本語－ウクライナ語語彙集を残して持ち運べるように携帯版（B6判）にして独立させたものです。会話編は、日本人のためにはウクライナ語にカタカナの、またウクライナ人のためには日本語にウクライナ文字の振り仮名が振ってあって相互に意思の疎通が出来るよう工夫されています。語彙編はウクライナの方が使いやすいように改変されています。ウクライナの方が日本で安心して生活出来るよう生活に必要な語彙をふやし、会話編と同様約4700語超の日本語の見出し語のすべてにウクライナ文字の振り仮名が振られてありウクライナ人が日本語を読めるようにしてあります。本書の母体となった【ウクライナ語会話・文法】（本体価格5,000円）も在庫あります。



【郵便販売のご注文方法】
◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。
★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方･小出版流通センター扱い
本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき､hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。